

随想

ひとあしずつ

山崎朋子



主婦の友社

随
想

ひとあしずつ

山崎
朋子

主婦の友社

山崎朋子（やまざき・ともこ）

1932年、福井県出身。女性史研究家。

主な著書に『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章—』（第4回大宅壮一ノンフィクション賞受賞）『火種はみずからの胸底に』『随想・胸より胸へ』（いずみ筑摩書房）、共著に『日本の幼稚園—幼児教育の児史』（第20回毎日出版文化賞受賞、理論社）がある。

随想　ひとあしずつ

発行　昭和五十五年八月八日　第一刷

定価　一二〇〇円

著者　山崎朋子

発行者　石川晴彦

発行所　株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―六

郵便番号一〇一　振替東京二―一八〇番

電話東京（〇三）二九四―一一一一大代表

印刷所　星野精版印刷株式会社

明善印刷株式会社

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

目次

I 生いたちの記

月に怯える	9
タローのこと	11
夢みていた日々	15
天皇の五十年	18
疎開女学生の暗い日々	22
わたしのお盆	26
点灯の気になること	30
片上村の思い出	34
挫折、そこから私は……	39
わたしの新婚時代	42
結婚生活に必要なもの	45
新「夫有用論	47
心痛む手紙	50

心のいちばん奥深いところにある手紙

結婚の条件

格闘の季節

読書で本当の豊かさを

『赤いガラスの宮殿』の思い出

へつうへへのあこがれ

座右に三冊の本ありき

II 忘れ得ぬ人びと

スーパーウーマンたち

平塚らいてう先生を悼む

明治女性の友情

——平塚らいてう先生と徳永恕先生と——

渋谷黎子の生涯

はるかな柳田国男先生

車中のジェントルマン

田中絹代さんの墓

作家「山田五十鈴誕生」!

105 101 97 93 90 85 82 79 73 70 68 65 61 56 53

男のやさしさにふれた旅

栗国安彦さんのこと

へボーグその後

福本章さんのこと

わたしの心友

「靖子さん、お元気ですか——」

Aさん夫妻のこと

アメリカよりの悲しい便り

片側にしか生えない髪の話

III 旅と出会いと

その土地の〈顔〉

田沢湖とハンドバッグ

蔵王のこんにやくおでん

石だたみの道

朝鮮名圧迫のあやまち

忘れ得ぬ出会い

中国よりのお客様

『サンダカン八番娼館』と中国

中国のある農村で

廃鉱に咲く紅い薔薇

土に生きるタイの女性

一足のサンダル

アジアの人びとの心

美しい女^{ひと}

林先生の親切

アスピリンと折鶴

わたし、来月結婚します

雪のシアトルのあたたかな人

ギリシアへの思い

パリの空の下で

あとがき

221 215 212 205 202 198 195 193 189 186 181 177 173 170

随想

ひとあしずつ

I

生 い た ち の 記

月に怯える

九月の声を聞くと、子どもたちは、涼しくなったせいもあってつい遊びすぎてしまう。おなかのすき具合でようやく気づき、道端に広げたおままごと道具を片付けてわが家へ向かうころには、短くなった日はすっかり傾き、いつの間に出たのか、月がその蒼白い光で子どもたちを包んでいる。

友達と別れてひとりぼっちで帰る足元に長い影法師が映ると、いやでも、「ああ、夜が来たんだわ」と思わざるを得ない。さっきまでのしやぎようがもはや遠い昔のように感じられ、急ぎ足に帰るこの道の先に、果たしてわが家が在るのかしら——と、不安でたまらなくなってしまうのであった——

わたしの子ども時代は、昭和十年代のことだったが、わたしは何度もこうした心細さを経験した。中秋の名月などと大人の世界で称揚される月ではあるけれど、このような状態の子ども

にとつては、月は決して美しく親しい存在ではなかった。

どんなに急いでも、どこまで歩いてても、蒼白い顔をしたまま黙ってついて来る——それは、無言の脅迫者のような不気味な存在なのであった。月の形や光が、すぐれていればいるほど怖かった。背筋に受けた皓々たる月光を、小さな手で払い払いしながらやっとなが家の勝手口に飛び込んだとき、いつもはうるさい母の叱り声が、涙の出るほどうれしかったことが忘れられない。

あれから三十数年の歳月がたって、月は少しの変わりもなく輝いているけれど、現代の子どもたちは、月に怯^{おそ}えないでテレビの怪獣に心を震わせている。それは、しあわせなことなのだろうか、それとも不幸なことなのだろうか。

タローのこと

わたしの少女期でもっとも悲しかった出来事は、それはもう言うまでもなく八歳の時に父を失くしたことであるが、その次に悲しかったのは、飼っていた猫タローの死であった。タローは、父を失ったわたしたち一家が、母の就職先が決ったため呉市から広島市内の工場の社宅へ引越したとき、近くの橋の袂に棄てられて啼いていたのを拾って来た猫である。拾い主はわたしだったが、母子家庭の経済的な不如意の上に戦争中の食糧不足も手伝って、「飼ってもいいわよ」と母の許可が出るまでは、子ども心に、タローの身の振り方について随分と心配したものだ。

拾ってきた一日、二日は、棄て猫を家へ連れてきた——とはなかなか言い出しにくくて、家の裏にあった小さな物置の隅にぼろ布を入れた箱を置き、そのなかに、黒と白の斑の小猫をまるで毀れ物でも扱うようにそうっと入れ、朝夕の餌は自分の食事を残しては運んでやった。

小さく痩せこけあまりにも弱々しかったので、わたしが学校へ行っている間にどこかへ行ってしまう心配はなかったが、箱のなかでそのまま息を引き取ってしまうのではないかと案じられてならず、学校が終ると、タローの小屋めざして飛ぶようにして帰って来たものである。タローはわたしの苦心の食事をあらかた片付け、まあるくなって眠っていた。あまり良く眠っているのでなんとなく心もとなくなり、タローの鼻先にわたしの耳をくっつけ、からだへ何回も触り、寝息と体温を確認して、ようやくに胸を撫で下ろしたこともあった。

こんなタローではあったけれど、晴れて家族の一員となつてからはめきめきと大きくなり、一年と経たないうちに小猫の面影はすっかり失われてしまった。小猫特有の可愛さが消えてしまつても、わたしには、タローと暮せる毎日はいそれまでの生活よりもずっと楽しいものだった。父を失くした淋しさを猫と遊ぶことによってまぎらわせるということもあったが、タローはわたしにとって最高の話し相手だったからである。

体があまり頑丈でなく、その上のろまで気弱者であつたわたしは、学校の友だちからも年子の妹からも泣かされることが少なくなく、そのたびにわたしは、タローの背中を撫でながら、自分の辛かったこと悲しかったことを報告する。もとよりタローはひとことの応答もしないけれど、タローが喉を鳴らすのを聞きながら話していると、いつかわたしは心和やかになつてしまふのであつた。母や妹や友だちに言えないようなことも、タローにだけは打ち明けることができた。

このタローが、ある日、外で猫要らずのお団子か何かを喰べたらしく、嘔吐で苦しみながらよろける足で家へ帰って来たかと思うと、間もなくわたしの眼の前で息を引き取ってしまった。この出来ごとは、わたしにとって衝撃であった。無論、タローを可愛がっていたからであるけれど、また、わたしにとって死というものを目撃した最初だったからでもあった。わたしの父は死んだということにはなっているが、実は行方不明で、したがってわたしは父の臨終というものは知らなかったのだ。

タローの最期の時間は短く、たぶん数分間にすぎなかったと思うが、わたしにはまことに長く感じられた。それはおそらく、子ども心にも生命の重みとでもいうべきものを直観したからであろう。眼をそむけたい思いがしきりとするのに、なぜかそむけることが許されぬ気がしてタローの死を見つめつづけたわたしは、やがて、冷たくなったタローを抱くと夕暮れの庭へ下り立ち、スコップを持ってタローの墓を掘りはじめた。沈丁花の匂い立つ木の下の窪みにタローをそっと下ろした時、わたしはふと、一年ばかり前のやはり夕暮れどき、弱り切って死んだようになっていたタローを小屋の箱の中に置いたことを思い出した。すると、それまで張りつめていた気持が一度に溶け、タローを失った悲しみが堰を切ったように流れ出した。そしてわたしは、大粒の涙を落としながら、タローの亡骸なきがらのかたわらに、今ひとつ、より大きな穴を掘りはじめたのである。

夕暮れの太陽がすっかり西の山に沈んで、わたしの恐い夜の闇が庭をおおっても、わたしは

スコップをにぎる手を離さなかった。わたしは、タローと並んで入るつもりで、自分の墓を掘ったのだった。

十歳も過ぎたのに一匹の猫の死にこんなにも悲しみ、共に土の下に入ろうと思った少女があったことを、今の子どもたちは愚かしく思うにちがいない。しかしわたしは、いたいけな小動物を可愛がることによって、孤独を知り初めた少女期をどんなに深く慰められたか知れないと思う。今日の子どもたちが、犬や猫や虫などを汚いとか恐いとか言って嫌うのは、愛情であれ物質であれあまりにも与えられすぎていて、子どもながらに心の淋しさを感じるゆとりがないからかもしれない。このように諸事万般に恵まれすぎているということは、果たして良いことなのであろうか——と考えるまじにはいられないこの頃である。

〔婦人之友〕一九七六年五月号